講　演

# ユネスコスクールと地球市民教育
## ── SDGs のめざす未来像との関係で ──

玉川大学 教育学部 教授　小　林　　亮

## ユネスコとユネスコスクール

こんにちは、玉川大学教育学部の小林亮です。本日は360名の参加と聞いて圧倒されていますが、皆さんとのスモールワークも行い、質疑応答の時間を設けたいと思っていますので、どうぞ積極的かつ主体的に参加してください。

まずはユネスコとユネスコスクールについてお話したいと思います。ユネスコは教育、科学、文化を通じて人類の恒久的な平和・福祉を実現することを目的としています。ユネスコ憲章の前文に、「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」という、多くのスピーチや講演、書籍にも引用されている有名な言葉があります。第２次世界大戦終戦直後に設立された国連専門機関として、戦争はもう二度としたくないという当時の人たちの思いが強く反映された言葉であり、創価大学の教育理念とも合致しているいい言葉だと思います。

ユネスコ本部はパリにあります。皆さんが冬休みや夏休みでパリに行くことがあれば、ぜひユネスコ本部にお立ち寄りください。パリ市第７区にあるナポレオンが若い頃に学んでいた陸軍士官学校（エコール・ミリテール）の真向かいにあり、エッフェル塔の近くでもあります。ユネスコ事務局の窓からはエッフェル塔がよく見えます。ユネスコ本部の建物は、フランスの建築家ル・コルビュジエが設計した三矢型の面白い形をしています。上野にある国立西洋美術

館も同じル・コルビュジエが設計したものですね。ということで、ユネスコは建物からして非常にユニークです。

地球の地図を月桂冠で飾った国連のロゴマークは有名なのでよくご存じだと思いますが、ユネスコのロゴマークについてはいかがでしょうか。ユネスコのロゴは、古代ギリシャ神話で学問と芸術の神であるアテナを祀ったパルテノン神殿のファサードを模しています。このように古代の文化遺産は現在の世界でもさまざまな文化的影響を及ぼしています。ギリシャの首都アテネにあるパルテノン神殿はユネスコの世界遺産にも登録されていますので、皆さんもギリシャに行かれたらぜひ一度ご覧になってみてください。壮大な神殿で、大変感動的です。

このユネスコ（国際連合教育科学文化機関）がつくった世界的な学校間ネットワークがユネスコスクール（ASPnet）です。1953年（昭和28年）に設立されました。1953年というと第二次世界大戦終戦から８年しかたっていません。ユネスコの掲げた理念を、政府や国連機関が指し示すだけではなく、小学校、中学校、高校といった教育の現場で児童・生徒たちに伝えていかなければいけない、学ぶ人たちの心（マインドセット）をより平和志向的なものに変えていかなければいけない、という趣旨のもとに、価値教育のための拠点としてユネスコスクールが設立されたわけです。

設立当時、わずか15学部、33校で発足しましたが、現在、ユネスコスクールがある国は182カ国、学校数は約１万1500校です。加盟校は世界中で刻々と増えているので、正確な数は言えませんが、とにかくすごい数です。うれしいことに、日本はユネスコスクール発足当時の1953年から加盟している創設期のメンバーなのです。また、意外に思われるかもしれませんが、北朝鮮も日本と同じくユネスコの加盟国であり、ユネスコスクールがあるそうです。今や北朝鮮も加盟しているほど、世界中ほとんどの国が加盟している学校間ネットワークがユネスコスクールなのです。

ユネスコ発足当時は、親を亡くした、子どもを亡くした、友人を亡くした、家を焼かれた等さまざまな戦争被害を受けた人々の間で平和への思いが強く、日本でも平和教育への取り組みとしてユネスコとスクールは非常な盛り上がり

を見せました。しかし、1960年代に入ると学生運動等さまざまな政治的イデオロギーによって国内が揺れる時代となり、ユネスコスクールも政治的な影響を受けることになりました。そして1970年代、ちょうど創価大学が創立されたぐらいから2000年ぐらいまでの30年間は、日本の経済成長が著しかった時代でもあり、生活が豊かになり、「平和」があまり切実な意味を持たなくなったのか、ユネスコスクールは停滞の時代でした。それが21世紀に入って大きく情勢が変化しました。

国連は2000年に「ミレニアム開発目標（MDGs)」を採択しました。本日のテーマでもある「持続可能な開発目標（SDGs)」の前身です。そして、2002年、ヨハネスブルグで開催された国連サミットでは、持続可能な社会をつくっていく人材育成が大事だということで、「持続可能な開発のための教育(ESD)」が採択されました。このESDの誕生により、急速に状況が変化したのです。具体的には日本では、当時の政府（小泉内閣）が、ユネスコスクールを「持続可能な開発のための教育（ESD)」の推進拠点として再活性化していこうと考えたのです。その結果、停滞していたユネスコスクールはめざましい発展を遂げ､2018年の現時点で、日本国内のユネスコスクールは1,149校に上っています。

国内ユネスコスクール1,149校の内訳として一番多いのは小学校です。次に中学校、高校と続き、大学の加盟校は５校です。ユネスコスクール自体に加盟している大学は、宮城教育大学、奈良教育大学、愛知教育大学、三重大学、そして私が在籍している玉川大学です。玉川大学は唯一の私学ですが、それ以外は全て国立の教育大学です。

その他、発達障害等さまざまな障害に直面している児童・生徒を支援する特別支援学校もユネスコスクールに加盟しています。また、幼稚園も日本国内だけで26園がユネスコスクールに参加しているのです。この事実から、ユネスコの追求する価値教育は、じつは幼児期からの教育課題だということが皆さんにお分かり頂けると思います。

私が奉職している玉川大学教育学部では、卒業後、小学校もしくは幼稚園の教員、あるいは保育士になる学生が大多数です。幼稚園の先生や保育士を志望

している学生にユネスコスクールの話をすると、「自分たちとはあまり関係がない」という学生もいます。しかし、幼稚園でもユネスコスクールの教育を進めているのだということを、是非、認識して頂きたいと思います。他にもシュタイナー学校や外国の児童生徒を教育するインターナショナルスクールにもユネスコスクール加盟校があります。

ユネスコスクールのロゴマークはいわゆる多重図形です。地球を現す丸い図の上に学校での学びを表象する本と子供の成長を示す若葉の二重の意味を持たせた図案で構成されています。ユネスコスクールのロゴは、必ずユネスコのロゴとあわせて表示するようにユネスコ本部が指示しています。日本では三菱 UFJ 銀行が社会貢献事業として、日本ユネスコ協会連盟と連携して作成したロゴマークの金属プレートを、ユネスコスクールに加盟した全ての学校に寄贈しています。

ユネスコスクールには、ユネスコが進めている平和を中心とする価値教育の推進拠点という役割があります。ユネスコはこれまで戦後70余年にわたり、様々な価値教育のイニシアティブを展開してきました。最初は1953年に「国際理解教育」を立ち上げ、1998年には「平和の文化」を提唱しました。さらには2000年には、「文明間の対話」プログラムを提唱しました。また、「文化の多様性」や「持続可能な開発のための教育（ESD)」、「地球市民教育（GCED)」、「文化の和解」といった教育課題に取り組んできました。グローバル社会のさまざまな問題を解決していくためのユネスコの教育イニシアティブはもちろん全ての人に向けられているわけですが、それらの価値教育をとくに重点的に進めていく一番の推進拠点がユネスコスクールなのだということをご理解頂ければと思います。

ユネスコスクールには重点的な学習テーマが定められています。忘れていけないのは、ユネスコスクールといっても、ふつうの公立学校あるいは私立学校であり、国語・算数・理科・社会・英語といった教科学習が行われているということです。それらと別の教科を立てるということではなく、通常の教科教育の中で、児童・生徒たちに重点的に伝えていってほしいという意味での学習

テーマです。

さまざまな教科学習の時間、今度教科化された道徳も含めた授業時間、あるいは総合学習の時間、ホームルーム、特活、クラブ活動（課外活動）等で、「持続可能な開発のための教育」、「地球市民教育」、「異文化間学習」と関連した学習を特に重点的に進めていってほしいという指針を、パリのユネスコ本部がユネスコスクールのネットワークで全世界に向けて発信しています。

ユネスコ本部のホームページを見ると、ユネスコスクールには、「平和のナビゲーター（“Navigators of Peace”）としての役割が期待されている」と記述されています。つまり、さまざまな課題を抱える世界で平和を構築していくために、特に教育がどういう方向で児童・生徒たちを導いていけばいいのか、その指針を決める上で主導的役割が求められているのがユネスコスクールの役割だということです。

現在、日本国内にあるユネスコスクールは文部科学省や日本ユネスコ国内委員会の支援を受けながら、平和と持続可能性を追求する教育活動を精力的に進めています。「ユネスコスクール全国大会」や研修会等で、ユネスコスクール加盟校の教員間で情報交換し、学び合い、お互いに支援やアドバイスをするという活動が保障されているところにユネスコスクールというネットワークの大きな強みがあります。

そして日本には、ユネスコスクールの取り組みを支援する「ユネスコスクール支援大学間ネットワーク（ASPUnivNet)」という大学のネットワークがあります。ASPnet とは“UNESCO Associated Schools (Project) Network”の略号で、ユネスコスクールのことです。それを高等教育の立場から支援する大学間ネットワークが日本にあるのです。2008年の11月に発足しました。

大学は教育機関であるとともに研究機関です。ユネスコスクールはどちらかというと小学校や中学校が中心になっていますが、それを高等教育機関である大学が一緒に支援をしていこうという仕組みがこの ASPUnivNet で、ユネスコスクールを舞台にした学校と大学のこうしたコラボは、世界で初めての取り組みです。ユネスコスクールを応援する大学のネットワークが日本にできたこ

とは、パリのユネスコ本部はじめ、海外でも非常に注目されています。

ユネスコスクールの活動をさまざまな意味で支援するのがASPUnivNetの役割です。例えば、ある学校がユネスコスクールに加盟したい場合には申請書の提出が必要ですが、平和教育や持続可能な社会づくりのための教育実践をしていること等、パリの本部に提出するためには加盟申請書を英語もしくはフランス語で作成しなければいけません。普段現場で忙しく授業をされている先生方にとって、こうした外国語による申請書作成の業務は大変です。そこで、ASPUnivNetの加盟大学が、単に翻訳だけではなく、教育活動の内容に関する支援やアドバイスを行っています。ESDの視点から見るともう少しこの活動を強調しておいた方がよいのではないか、あるいは教科間のつながりについてこのようなビジョンを提示すれば説得力を持つのではないか等、ASPUnivNet加盟大学の教員は、加盟申請校のためにさまざまなアドバイスを提供し、また教員研修などの支援を行っています。

ユネスコスクールは世界的な学校間ネットワークなので、海外のユネスコスクールとの交流に向けた支援もASPUnivNetの役割の一つです。今はSNSやインターネットが発達しているので、時差や言語の違いはあっても、たとえばテレビ会議やSkype、メール等を使って、さまざまな形での学校間国際交流ができる時代です。

例えば、アフリカ諸国のユネスコスクールと交流したいが、どこに連絡したらいいのか、交流のきっかけが見つからないといった場合に、大学自体もそうですし大学の教員も世界のさまざまな国との交流網を持っている場合が多いので、そうした国際ネットワークを生かして、「そうしたテーマでしたら、この国のこの学校と連絡を取ってみてはいかがですか」といった形の支援をします。

2018年現在、全国22大学がASPUnivNetに加盟しています。創価大学もASPUnivNetに加盟して下さいました。東京都におけるASPUnivNetの加盟大学は、現時点では創価大学と玉川大学の２大学だけです。ASPUnivNetには、それぞれの加盟大学がユネスコスクールを支援する地域分担が決められています。東京について言えば、東京西部地域は創価大学、23区を含む東部は

玉川大学が担当する取り決めができています。

こうした事情から考えれば、創価大学生の皆さんはユネスコスクールを応援する任務を帯びた当事者であるといえるでしょう。特に学校教員を目指そうとされる方は、創価大学がユネスコスクールを支援する拠点大学だということを認識し、できれば実際の支援活動にさまざまな形で参加して頂くといいのではないかと思います。

## 持続可能な開発のための教育（ESD）

次に話題をESDに移しましょう。ここであらためて確認しておきたいことは、20世紀に起きた第一次世界大戦、第二次世界大戦のような全人類を巻き込んだ悲惨な戦争は二度とやってはいけないという強い決意を持って設立された、恒久平和を実現するための国際機関が国際連合であり、教育、科学、文化、コミュニケーションを通じた平和構築をめざす国連専門機関がユネスコであるということです。

そもそも、平和とは何でしょうか、そして、平和を実現するためにはどうすればよいでしょうか。例えば、トルストイの有名な小説に『戦争と平和』がありますが、ここでは平和はどのように描かれているでしょうか。平和とは戦争のない状態だと言う人も多いと思います。では、戦争がなければ平和なのでしょうか。

私は玉川大学教育学部の教員であり、また臨床心理士としてスクールカウンセラーも務めているので、特に目につくのが学校現場におけるいじめや親の虐待といった児童生徒を苦しめる問題です。他の子からの身体的な暴力や嫌がらせ、いじめを受けているだけではなく、今はネットを使った、精神的にじわじわと追い詰めていく陰湿ないじめもあります。戦争をしていない「平和な」日本に暮らしているからといって、いじめや虐待を受けている子どもの生活が平和といえるでしょうか。絶対に平和ではありません。彼らにとっては毎日が地獄なのです。そういうことからも、「平和とは何か」という問題を今一度原点に立ち返って考えてみることは、ユネスコスクールを支援する任務を帯びた創

価大学の皆さんにとって非常に意味のあることだと思います。

そこで、皆さんに配布した資料『わたしの平和宣言』（Manifesto 2000）を読んで頂きたいと思います。ノーベル平和賞受賞者など世界を代表する識者が、新世紀開幕前の2000年に集まり、世界中で国家の対立、民族紛争やテロが起きているが、国連・ユネスコの理念である平和を実現するためにはいったいどうすればいいのかについて討議しました。その結果を非常にシンプルな六つの項目に集約して宣言したものが『わたしの平和宣言』です。

続いて、ショートワークをやってみましょう。４－６人でグループを作ってもらいます。各グループで、「平和宣言」の６つの項目の中で一番心に響いた宣言、これは私たちにとって特に大事だと思ったものを一つだけ選んでください。そして、その項目の内容を実現するために、自分自身が日常生活の中で具体的にどのようなことをすべきか、できるかを話し合ってください。それでは３分間で討議に取り組んでください。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

それでは時間になりましたのでお話をやめてください。全てのグループに討議の結果をお聞きしたいところですが、時間の制約もありますので、何人かにうかがってみましょう。

グループ１　私たちのグループでは４番の宣言、「相手の立場になって考えます」を大切にしたいという意見になりました。本当は、全体的に考えれば１番を大切にしたいですが、少し抽象的な感じがしましたので、４番をとりあげました。相手の立場に立つということは、自分に分からないことがあったり、その人のバックグラウンドが分からなかったとしても、まず生命を大切にするということにつながるのではないかと思ったからです。

小林　ありがとうございます。素晴らしい答えです。相手の立場に立って考える、相手を尊重することが実は生命を大事にすることにつながりますよね。ですから、実は「わたしの平和宣言」の１番と４番はつながっているという指摘は鋭い分析です。非常に良い意見だと思います。ありがとうございました。

グループ２　私たちは、３番の「思いやりの心を持ち、助け合います」を選択しました。理由としては思いやりの心があれば、６つの項目どれにも対応できると考えたからです。助け合いがあれば全ての生命を大切にすることにもつながるので３番が一番重要だと思いました。

小林　そのために、あなたたちグループは何ができると思いますか。

グループ２　創価大学の学生としては、やはり普段から対話をし、相手のことを知ることだと思います。

小林　なるほど。ありがとうございます。非常にいい答えです。みなさんはそれを実践されていると思います。実は今年の10月に私は創価大学で講演したことがあります。その際、教育学部の校舎の場所が分からずに迷っていたときに、学生の方が「どこかお探しですか」と場所を教えてくれました。とても助け合いの精神が満ちているキャンパスだと思って感動しました。まさにその通りです、ありがとうございます。

グループ３　私たちは、５番の「かけがえのない地球を守ります」を選択しました。まずは地球を大切にすることが私たちにとって具体的なことができると思ったからです。これから自分たちがよりよい環境で生きていくということを考えて５番を選びました。

小林　では、そのために私たちができる行動は何でしょうか。

グループ３　地球環境ということでいえば、プラスチック減少のためにエコバッグを使うとか、節電をするといったことが考えられるので、そのための行動を取っていけばいいと思いました。

小林　皆さんありがとうございました。お答えいただいた３グループの方はそ

れぞれ違ったものを選択され、きちんと当事者意識を持って考えてくれた意見でどれも胸に響くいい答えだったと思います。今後も、自分が平和を実現するためには何ができるのか、成績評価ということとは別に自分の宿題として、人間としての課題として考えてもらえればと思います。この他にもよい答えがたくさんありそうですが、時間の制約上、次の話題に移りたいと思います。

日本のユネスコスクールは、『わたしの平和宣言』が出された2000年の時点では全国でわずか24校でしたが、今では1,149校まで急成長しています。これほどの急成長が達成できた要因としては、文部科学省が強く後押ししてユネスコスクール推進事業を進めていることがあります。文部科学省はユネスコスクール推進にあたって、ESD の推進拠点を作っていく取り組みとしてこれを取り上げたのです。つまり、ESD 実践を先頭に立って進めていくのがユネスコスクールだという定義です。

ESD とは Education for Sustainable Development、つまり「持続可能な開発のための教育」の略で、ユネスコがすすめている価値教育の一つです。皆さんは教育学部だけではなく法学部や経済学部等の方もいると思いますが、「持続可能性」という言葉は今日さまざまな所で使われています。今回、文部科学省が学校教育の基本指針として学習指導要領を新しく改訂した中にも、持続可能という言葉が入っています。つまり新しい学習指導要領には、持続可能な社会の担い手をつくる教育が大事だと明記されていますので、ある意味で ESD は日本の教育政策における国是だと言ってもかまわないと思います。

ESD については比較的長い歴史があり、この歴史は地球環境の悪化と連動しています。特に2002年、皆さんはまだ生まれて間もない頃だと思いますが、当時の日本政府（小泉内閣）が南アフリカのヨハネスブルグで行われた世界首脳会議で ESD を提唱しました。これからは持続可能な社会をつくっていく人材育成をしていかなければ人類社会はもたないというメッセージです。

そして、ESD がめざす目標を人類全体の考えとして明文化したもの、可視的に分かりやすい形で示したものが国連の「持続可能な開発目標 (SDGs)」であるといえるでしょう。SDGs では、2030年に向け、人類社会として持続可能

な未来をつくるための17の目標が掲げられています。この目標は、途上国や一部の人たちだけが取り組めばいい課題ではなく、私たち人類全員が取り組まなければいけない開発目標です。ちなみに、SDGsについては、現在日本政府もESDとの関係でその普及と実践を重視しており、またさまざまなメディアでも広く取り上げられるようになっています。

例えば、ピコ太郎さんがSDGsの広報動画“PPAP”をつくっています。PPAPは世界的にヒットした元々のPPAPではなくて、同じメロディーに乗せて“Public & Private Action for Partnership”と踊っている動画がYouTubeで見ることができます。他にも、吉本興業の芸人の方が関西弁で面白おかしく「SDGs数え歌」をつくっていて、これもYouTubeで見ることができます。

ESDが提唱されるに至った大きな契機は環境問題でしたが、環境教育だけではなく、現在ではESDの教育課題は非常に学際的に捉えられており、国際理解教育や学力問題、さらには、これは私の専門になりますが心の問題、社会問題といったもの全部に関わっています。ESDは非常に多角的で学際的な教育イニシアティブなのだということも、皆さんに知っておいて頂きたい点です。

人類の存続を難しいものにする「持続不可能な現実」という点では、地球環境問題だけでなく、社会文化的な問題も非常に重要なわけです。さまざまな問題を解決して人類の持続可能な発展を実現していくためには、私たちの生き方自体を改革していかなければいけない、新しい価値を創造していかなければならないということです。

文部科学省は、学校現場で児童生徒たちに親しみやすい形でESDを学んでもらいたいということで独自の教材も開発しています。「今日よりいいアースへの学び」という副題をつけ、『ESDクエスト』というタイトルの冊子を作り、ユネスコスクールをはじめ、さまざまな教育関連機関に配布しています。この『ESDクエスト』の中では、このままでいくと2050年までには地球の温度は平均1度上昇してしまう等、地球が直面している諸問題についてイラストも交えて分かりやすく解説しています。

ユネスコの中心的な課題として学びがありますが、ユネスコ21世紀教育国際委員会のジャック・ドロール委員長が1996年に『学習：秘められた宝』と題した報告書を発表しました。同報告書に「21世紀は人類にとって四つの学びが一番大事になる時代」だと書かれています。その四つの学習の柱とは何かというと、一つ目は『知ることを学ぶ』(learning to know)、二つ目に『実践することを学ぶ』(learning to do)、三つ目は『人間として生きることを学ぶ』(learning to be)、四つ目が『共に生きることを学ぶ』(learning to live together）です。

知る・実践・生きるはどちらかというと古典的な哲学における三領域、つまり認識論、倫理学、存在論（形而上学）に対応するわけですが、共生することの学びが大きな学習の柱だと言ったのは実はこの報告書が初めてであろうと思います。ここからも見て取れるように、私たちの時代の大きなキーワードとして「共生」があるのです。

「共生」を説くことは簡単ですが、実際に身近なこととして自分の行動を含めて考えるのは意外と難しいことではないでしょうか。一番身近なところで言うと、たとえば男性と女性では、考え方や感じ方が違い、お互いの気持ちがわかりにくい、理解が難しいということが多いのではないでしょうか。また、世代間の相違、学生の視点と教員の視点の相違ということはどうでしょうか。「なぜ先生はこういうことを言うのだろうか」、逆に教員は、「なぜ最近の学生はこうなのか」といったように世代間の相互理解も難しいものです。

関東人と関西人の違いということもよく言われますが、立場や文化的背景を異にする人との相互理解は意外と難しいものです。創価大学では仏教の信仰をお持ちの方が多いと思いますが、世界には仏教以外の宗教もたくさんあります。皆さんは、キリスト教信仰を持っている人との対話を上手にできますか。また、創価大学への外国人留学生にはたとえばインドネシアなどイスラム教国からの学生も多くいらっしゃると聞きましたが、その人たちとの相互理解はうまくできているでしょうか。

価値観、行動様式、文化的背景などが自分と違う人たちとどのようにうまくやっていけるかが、21世紀の私たちに課せられた大きな宿題だと思います。異

質な人たちとの共生こそ、現代社会における最大の教育課題だと言えるでしょう。またこれと関連して、未来の世代と私たちの世代との共生、自然環境と人間社会との共生、日本と諸外国との共生といったさまざまな共生の側面を見ていく必要があります。

日本のユネスコスクールでは、それぞれ特色あるカリキュラムや学習活動を実践しているのですが、例えば、奈良県の東大寺の近くにある興東館桐生中学校では、伝統文化をテーマとし、地域特性を生かしたユニークな ESD 学習（世界遺産教育）を推進しています。

この中学校では奈良時代の先祖たちと自分たちとが実は深くつながっていることを体験するために、平城宮の仕事体験や宮中で使われていた四字熟語を書くといった学習活動を行い、平城宮で演奏されていた雅楽の鑑賞などをしています。また、給食として古代米や飛鳥汁を提供するなど「ESD 給食」という取り組みもあります。いずれも非常にユニークな学習活動で、奈良の地域特性をうまく生かしている ESD 実践だと思います。

## 地球市民教育

最後に地球市民教育についてお話したいと思います。実は持続可能な開発のための教育（ESD）と地球市民教育（GCED: Global Citizenship Education）は同じ目標をめざしています。この二つのプログラムは、平和で持続可能な社会を創っていくためにユネスコがすすめている未来教育プロジェクト、未来志向の価値教育なのです。世界的に見れば、ユネスコスクールはこの二つの教育プロジェクトの推進拠点と位置づけられています。

地球市民教育とは、要するに地球市民としての資質を育む教育ということです。前国連事務総長のパン・ギムン氏はグローバル教育の第一人者でもあり、2012年に「グローバル教育第一イニシアティブ」（Global Education First Initiative）を発表し、人類が直面している課題解決のためには三つの教育課題が最重要だと提唱しました。

一つは世界全ての子どもを就学させることを揚げています。世界には学校に

行けない子どもはまだ何億人もいて、日本の人口よりも多いのです。全ての子どもにまずは教育を与えなければ、児童の権利を守っていることにはならないということです。

ただ、こういう話をすると恐らく皆さんの中には、でもそれは日本の課題ではない、途上国の課題と思う人もいるのではないでしょうか。本当にそうなのかと私は問いたいと思います。日本では一応全児童が就学していることになっていますが、現実問題として学校に行けていない児童・生徒が多くいます。現在、日本全国で不登校児童生徒数は13万人を超えていることをご存知でしたか。私は心理臨床にかかわるスクールカウンセラーとして、学校に行けない子どもが日本にもたくさんいるのだという事実に注意を喚起しておきたいと思います。

学校はあるし、行く権利はもちろんありますが、学校で疎外され、いじめられている、また、勉強についていけない、あるいは家庭の貧困の問題等のさまざまな原因で学校に行けないのです。不登校児童生徒数が13万人を超えているという現実は、就学は途上国の問題だけではなく日本の問題でもあることを如実に示していると思います。

「グローバル教育第一イニシアティブ」は、教育の最優先課題の二つ目に、質の高い教育の実現を掲げています。何が質の高い教育か、これも重要な検討課題です。三つ目は地球市民性の育成を掲げています。パン・ギムン国連事務総長が提唱したこの三つの優先課題に基づいて、持続可能な開発目標（SDGs）の４に『質の高い教育を全ての人に』がうたわれており、その達成指標７には、持続可能な開発のための教育、持続可能なライフスタイル、人権、男女の公平、平和の文化、非暴力の推進、地球市民性、さらには文化的多様性の尊重、持続可能な開発に向けた文化の貢献、等が掲げられています。地球市民性とは、まさに SDGs の大事な目標の一つであるということです。

ユネスコの見解としては、ESD と地球市民教育は同じ課題状況に基づく教育プログラムであり、全ての人を巻き込んでいる地球的問題に関わっているので共通のニーズに応える教育イニシアティブだということになります。そして、グローバル社会の諸問題に当事者として積極的な貢献ができる人を育成す

ることが地球市民教育の大きな目標になります。市民性教育（公民教育）は昔からありますが、まずは皆さん自身が世界に対して当事者になれているかどうか、社会の一員としての責任感や積極的関与ができているか、ここが問われます。まずは皆さん自身に地球市民になってもらいたいと思います。また、将来教育に関わろうとしておられる方、学校教員になる方は、ぜひとも子どもたちを立派な地球市民に育てていってほしいと希望します。

ここで、よくある誤解を解いておきたいと思います。地球市民性の向上は、別に私たちの日本人性を否定することにはなりません。私たちのアイデンティティは多元的で複合的な構造をもったものだからです。これはまた、アイデンティティの多様性を受け入れる寛容さが大切であることを意味します。例えば皆さんの中で仏教徒の方がいれば、仏教徒以外の方たちを否定しないことが地球市民性の態度です。この授業の出席者の中には日本人以外の方もいると思いますが、その方たちの文化的特徴や民族性を否定しない、あるいは見下げたりしないことはとても大事です。自分と違う人を受け入れていく態度（多様性の尊重）が地球市民性のとても大事な発達課題になるだろうと思います。

ユネスコは地球市民性を育てていくための発達モデルを認知的領域、社会情動的領域、行動的領域と三つの領域に分けて提唱しています。地球市民性を育成するためにはどういった課題を達成していかなければならないかといった学習課題チャートも作成しています。今後、地球市民性の育成に向け、ユネスコが提唱するこうした学習モデルを学校現場で実際の教育活動にどう活かしていくか、どのように授業実践に落とし込んでいくかが大きな課題になってくると思います。

先日、ユネスコ本部で行われた専門家会議で、地球市民教育の教材作りに関わってきましたが、例えば葛藤解決や総合性といった課題が地球市民教育では非常に大事になってくると思います。時間的に全部を扱うことはできないので、一つだけ皆さんに紹介したいと思います。

認知的領域、社会情動的領域、行動的領域の３領域のうち行動的領域について、ユネスコが特に重視しているのは対話です。先ほど、池田大作先生の名誉博士号や名誉教授号等数々の記録が展示されている池田大作研究センターを案

内して頂きました。例えば、20世紀を代表する偉大な歴史学者であるトインビー博士と池田大作先生が対話をされた記録が非常に印象的に展示をされているのを見て、創価大学は対話を建学の理念として重視されていることがよく分かりました。

ユネスコも対話を強調しています。先ほども申しましたように、自分と違う人と一緒にやっていく、共生するためには前提条件として対話がなければいけません。私もまだ対話が十分にできているとは言えない現状なので、あまり偉そうなことは言えませんが、みなさん自身がよき地球市民として成長していくために、いろいろな意味で自分と立場の違う人との対話を積極的に行うことを強くお勧めします。

具体的に言えば、日本人の方は日本人以外の方と対話をしたほうがいいし、仏教徒の方は仏教以外の信仰を持っている方とぜひ対話をするといいと思います。女性であれば男性と対話をしたほうがいいし、男性は女性と対話をしたほうがいいです。若い世代であれば年長の人や、あるいはもっと小さい、幼い人たちと対話をするといったように、さまざまな形で自分とは異質な人たちと対話をしていくといいと思います。そのような「主体的、対話的で深い学び」を進めていくことが大事だと新しい学習指導要領にも書いてあります。つまり「対話」は、日本の学校教育の基本方針でもあるということです。その対話の場として、実はユネスコスクールが大きな可能性を秘めていることを指摘したいと思います。

現在私は、玉川大学で教師養成のための「ESD 実践学習プログラム」を進めていますが、そのためにさまざまなワークシートを作っています。

ひとつの事例として日韓関係について学ぶためのワークシートを御紹介したいと思います。日韓は隣国で民族的にも文化的にも実は結構近く、お互いの交流も今は非常に盛んです。皆さんの中に韓国籍の方がいらっしゃるかもしれませんね。私は何度か韓国に行ってさまざまな交流活動をしていますし、韓国の方もたくさん日本に来ていて、お互いにとても大事なパートナー、隣人です。その一方で、日本による植民地支配や第２次世界大戦といった深刻な負の歴史があり、そうした歴史的トラウマに起源をもつ難しい政治的な課題や葛藤問題

も日韓の間には多く存在します。

最近では、第２次大戦中の徴用工に対する賠償問題で、韓国の最高裁が判決を出したことに対して日本政府が反発をするという問題が起きています。しかしながら、皆さん、まさにこれこそ対話を通じて平和をつくっていくために、とても大事な課題、チャレンジングな学習課題だと思いませんか。まず隣国と仲良くできなければ、世界平和は実現できません。日韓の間に難しい問題がたくさんあるのは分かりますが、まさにそれだからこそ、対話の努力を諦めてはいけないと思います。

従軍慰安婦像の問題は徴用工の問題とも重なっていますが、皆さんの中にはソウルに行ったことがある方がたくさんいると思います。ソウルの日本大使館の前に行くと、大使館に向けて従軍慰安婦像が置かれています。日本人にとってはギョッとする光景ですが、もちろん韓国の方は撤去しません。その従軍慰安婦像の背後には、「独島（竹島）は明らかに韓国の土地だ」等、日韓問題に関わるさまざまな政治的メッセージが書いてあります。そこで、なぜそのような従軍慰安婦像が日本大使館の前に置いてあるのか、背景には一体何があるのかを実際にユネスコスクールの生徒に調べてもらいました。

この問題だけをみると、いかにも日本と韓国は仲が悪くて、互いにいがみ合っているように見えるかもしれません。しかしそれは事実の一面でしかありません。日韓の長い関係史を見ると、江戸時代の朝鮮通信使のようにとても友好的で深い文化交流の実績のあることもわかってきます。

日韓関係の歴史にはポジティブな面とネガティブな面の両方があるということを理解した上で、それでは本当の和解をするためには日本と韓国とはそれぞれ何をすればいいのか、そもそも和解とは何か、許すとはどういうことなのか、また、それに向けて日本人としてできることは何か、韓国人として知ってもらえることは何か。こうした諸問題を一緒に考えていきましょうというのが今回作成したワークシートの趣旨です。教師育成のための授業において、実際にこうしたワークシートを活用した学習活動をできればと思っています。

これは国同士の関係でも個人の関係でもそうですが、お互いに過去のさまざまな争いでトラブルがあったときに、どのようにわだかまりを解いて許し合っ

ていくのか、その課題に真正面から向き合うことが大事です。こうした和解の仕事がなければ、本当の平和は訪れません。一方が絶対に相手のことは許さないと思っていたら平和は訪れないわけです。それでは歴史的トラウマを克服するために、お互いにどのような対話をし、どのように学び合いをすすめていったらいいのかとについてお話すべきところですが、残念ながら時間がなくなってしまいました。ですので、私の話はここまでにさせて頂き、学生の皆さんからの質問、御意見をうかがいたいと思います。ありがとうございました。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

質問一　ユネスコスクールで様々な教育が行われていることをお伺いしましたが、それが先生たちから子どもたちに一方的にならないように、教師もまた児童・生徒から学ぶことができる関係性が大事だと思いました。そのような教育のために教師の方々が学習する場、環境はあるのでしょうか。

小林　先ほども申しましたが、ユネスコスクールの理念、あるいはユネスコの価値教育の理念は「全員野球」の精神です。もちろん、教師は学生や生徒を教える任務はありますが、学生から教わる謙虚さ、あるいは幅広さもとても大事です。ただ教える・教えられる関係ではなくて、全員が持続可能の問題、平和の問題、地球市民の問題に取り組んでいかなければいけません。ユネスコスクール加盟校では、そのために様々な教育プログラムを展開しています。ただ、学校一つでできることは限られていることもあり、例えば、文部科学省が、毎年１回、全国のユネスコスクール関係者を集めてユネスコスクール全国大会という全国規模の研修会を実施しています。ここでは教師も参加するし、教育委員会など行政関係者も参加するし、生徒も学生も参加します。

来月2018年12月８日土曜日に、文部科学省主催の「第10回ユネスコスクール全国大会」が横浜市立みなとみらい本町小学校で開催されます。パリの本部からもユネスコ職員が来賓として参加されます。共に学び合うことはとても大事な営みなので、さまざまな地域研究会や大学主催の教員研究会なども行われています。非常にタイムリーでいい質問でした、ありがとうございました。